

経営倫理士の目線で古典を読んでみた♪

～古典から学ぶ経営価値四原理システム～

経営倫理士コンソーシアム

代表幹事

北村和敏

第8回投稿（2026年1月31日）

『トマス・アクィナス』



今回はイタリアの哲学者であり神学者である「トマス・アクィナス」についてお話しします。アリストテレス哲学を神学に導入し、信仰と哲学を調和させた人物です。まあ、哲学によって神の証明をしてスコラ哲学を完成させたと言うのですから、これだけ聞いても偉大さが伝わってきます（凄）。なんとなくですが・・・（汗）。

まずはヨーロッパの歴史を理解していないと「スコラ哲学」にも興味が湧いてきませんよね。まあ、スコラはスクール（学校）の語源だそうです。ちょっとした豆知識ですね。（笑）。ローマ帝国時代に今のヨーロッパに存在していたアリストテレス哲学は、キリスト教が国教化され、時間が経つにつれて忘れ去られていきます。この辺りの経緯はよく分かりませんよね。昨日まで素晴らしい学問だったアリストテレス哲学が、中世初期にはヨーロッパでは消滅していたのです。消滅した理由はいくつかあるようです。ローマ帝国の崩壊とキリスト教による異端思想の弾圧、そしてヨーロッパの国民の識字率の低下も影響しているようです。

その失われたアリストテレス哲学はなんとイスラム世界に移動したようです。そうなのです。もしもイスラム文化圏が受け皿になっていなかったら、ギリシャ・ローマの哲学はこの世から完全に消滅していたかも知れません。まさに捨てる神あれば捨う神ありって感じでしょうか。（まあ、同じ神なのですが・・）そこで疑問が出てきますよね。なぜイスラム文化圏にギリシャ哲学が受け入れられたか、です。一つはイスラム教の君主カリフが

ギリシャ哲学を帝国の統治のための実用的な学問として活用していたようです。イスラム教では理性の追求が神の意志を知る手段だったと言うではありませんか。ギリシャ哲学はイスラム神学との調和による共存があったようです。しかし11世紀から13世紀にかけてイスラム文化圏からギリシャ哲学が衰退していきます。もしこれがなかつたら世界史は大きく変わっていたでしょうね。ヨーロッパのキリスト教圏が後進国、イスラム国が先進国となり世界の霸権はまさに「パクス・イスラム」となっていたかも知れません。

しかし、11世紀から12世紀にかけていくつかの事件が重なってギリシャ哲学の衰退がはじまるわけです。一つはイスラム教神学者ガザーリーという男が、ギリシャ哲学はイスラムの教義と矛盾すると言い出します。イスラム文化圏からのギリシャ哲学の衰退が始まります。矛盾への反論として哲学者イブン・ルシュドが『哲学の自己矛盾』を著し「哲学と宗教は矛盾しない」と説いて、ガザーリーに反論していますが受け容れられませんでした。イスラム国にいた philosophers は出番と居場所がなくなっています。それに拍車をかけたのがモンゴル族の侵略でこれまで数世紀に渡って蓄積されたギリシャ哲学を納めた「知恵の館」などすべてが失われたようです。当然、哲学者たちのヨーロッパへの大量移動が起きたようです。

アリストテレス哲学は十字軍の遠征をきっかけにヨーロッパに流入したと一般的には言われますが、イスラム文化圏では上記のような事態が発生していました。そして一度はヨーロッパから追放したはずのギリシャ・ローマ哲学がブーメランのようにキリスト教文化圏であるヨーロッパに逆輸入されたのですから歴史とはじつに皮肉な感じがしますよね。そして今回の主人公であるトマス・アクィナスによって神学を成り立たせる哲学、「スコラ哲学」を完成させます。

同じ一神教であるキリスト教とイスラム教がギリシャ哲学を受容したり排除したりしています。もしもトマス・アクィナスも一緒になってキリスト教との矛盾を叫び、ふたたびイスラム圏にギリシャ哲学を放り投げていたら世界の歴史は今とは違った状況になっていたでしょうね。世界の歴史が教えてくれているのは、哲学をうまく消化した文化圏が物理的な豊かさを手にしていることです。歴史にもしもはありませんが、もしトマス・アクィナスがいなかつたらヨーロッパのその後の繁栄はなかったのは確実ではないでしょうか。そういう意味ではキリスト教文化圏の人たちはトマス・アクィナスに足を向けて寝れませんね。しかしカトリックでは聖人として祀られているようですが、プロテstantでは今一の扱いをされているようです。このあたりも深堀すると哲学と信仰の在り方が鮮明になるかも知れないですね。

ちょっと歴史の話が長くなりました。トマス・アクィナスの思想に戻ります。トマス・アクィナスは哲学を排除するのではなく、哲学をもって神学を論理的に説明していくところが秀逸ですね。理性と信仰を通して神の真理を直接的に理解し、魂が神へと向かうために「観想」という概念を持ち出しています。アリストテレス的な「知的観想」とキリスト教的な「神との靈的一致」の両方を含む概念です。この「観想」を基盤にして最高の善(神)に向かう知的・靈的活動、つまり「実践」活動こそが究極の幸福だと宣言しています。観想と実践は表裏一体なのでしょうか。そうなのです。トマスの哲学は世界の秩序を神と位置付けて、その秩序を知るだけでなく実践して知ることで幸福が成就する感じなのでしょうか。トマスは言います。「観想の実りを他者に伝える」、「他者を照らす」ことの大切さを強調しています。そうなのです。「観想」を例えるなら、研究者による分析ですね。それを基に「実践」して初めて究極の幸福である「神を見ること」ができるのだとトマスは言いたいのでしょうか(難)。

現代の医学会でも基礎と臨床を連動させることで最終顧客である患者に最大の幸福(メリット)を与える活動が盛んに行われています。専門が細分化され医療が複雑になってくると、医師だからと言って、すべての知識を持つことは不可能です。そこでそれぞれの専門家たちがその分野の治療法のガイドラインを作り、専門外の医師に学会を通して伝達しているのです。一般の開業医には自分の専門外の患者もたくさん来るわけです。そんなときその分野の専門の先生方が研究・分析した治療ガイドラインをもとにして最新の治療を提供してくれるので。これってトマスの言う「観想の実りを他者に伝える」のたとえとして分かり易くありませんか(自画自賛)。

今回、気づいたのですが、一般的にスコラ哲学では、「哲学は神学のはしため」という言葉が先行して、神学が上で哲学は下に位置づけられていますよね。ピラミッドの上層部に神学の領域があり、人間の理性では到達できない問題を神学が扱うように言われますが、それだけでは神学は成り立たないようですね。恩寵の世界である神学を支えるもの、つまり哲学(理性)があつてはじめて神学が成り立つ関係をトマスは言いたかったのではないかでしょうか。「はしため」という言葉が先行してトマス哲学が矮小化されていませんか。あくまでトマスの哲学は神学理解に不可欠なものであり、「はしため」などとは一ミリも思っていないかったような気がします。そうなのです。あえて表現するならば人間の細胞のようなイメージです。細胞そのものが神学であり、構成している細胞核が哲学の関係なのではないでしょうか。細胞核のない細胞は分裂できませんし、それは細胞とは言いませんよね。神学という細胞は哲学を内包することで自己増殖が起きる関係にあるのではないでしょうか。神学と哲学の上下を表すような表現はトマス哲学の誤解を招くような気がします。たとえ話になるとなぜかドヤ顔になってしまいます(汗)。

この関係は企業の経営にも当てはまりますね。神学が哲学を内包したように、経営においては経済性を公共性で内包することで企業は「社会の公器」として存在を許されています。資本主義社会において利益至上主義は敬遠されますが、ヒト・モノ・カネを使って利益が出せない企業は社会的に無責任と言われても仕方ありません。そうなのです。公共性だけを強調して経済性が蔑ろにされては持続可能な企業とは言えません。資本主義社会において利益は企業存続のためのコストと位置づけるのが適当ですよね。トマス流に言えば、経済性が哲学で、公共性が神学の関係でしょうか。余計分かりづらいですか（汗）。まあ、神学を知るには哲学が不可欠であるように、企業も「社会の公器」であるためには、公共性に軸足をおいて利益を出し続けることが必要なのです。そのためにはイノベーションという神の恩寵に似たインスピレーション、トマスの言う「^{しるし}徴」が不可欠なのです。（北村）